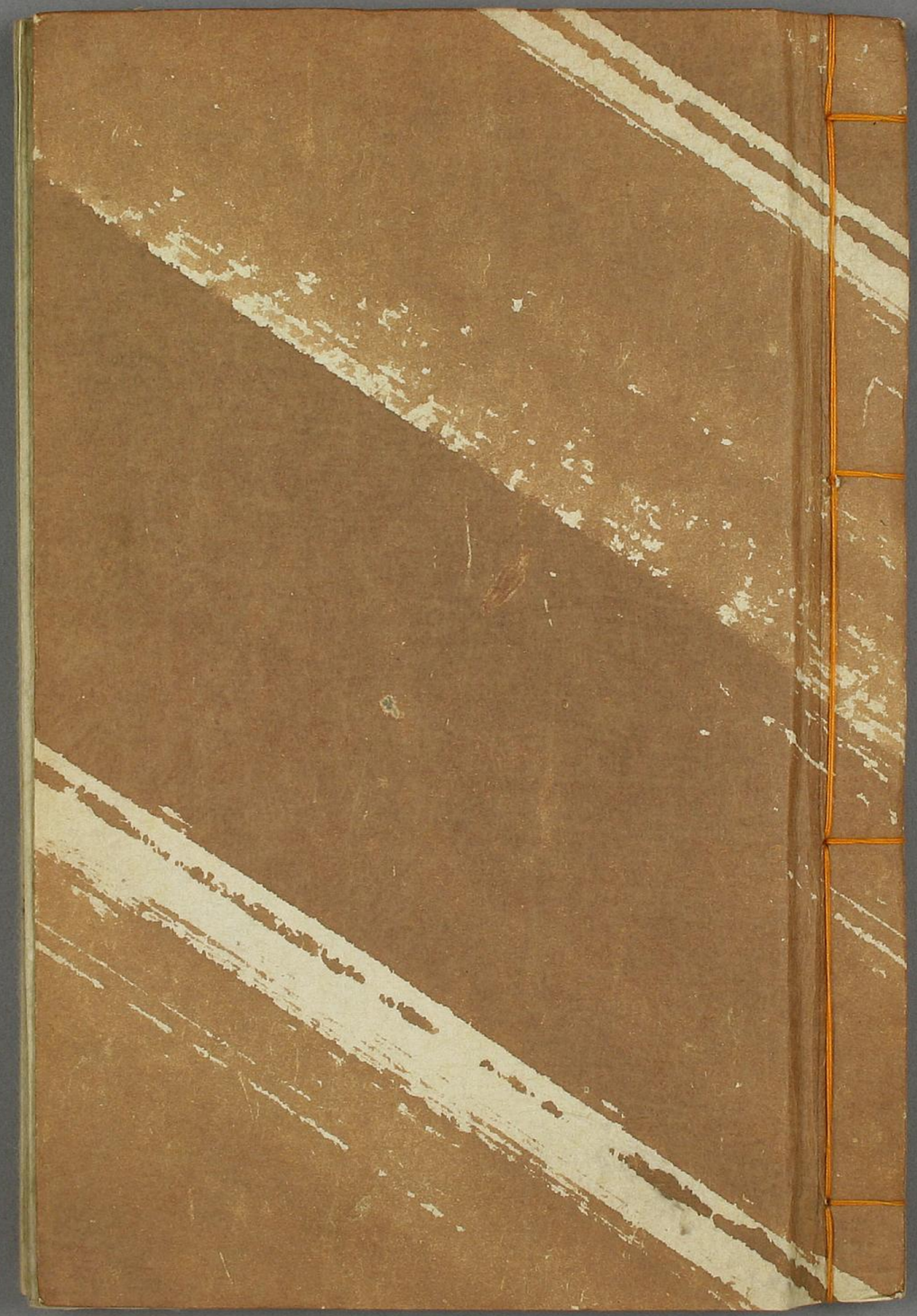


金庫三代記

服部應賀著

初代蔵

A770
48-7695

官許明治七年六月廿五日

初代之
石部
金吉辛
苦背
負寶之
山登

親ゞ苦を去る
初代蔵　一冊
初松魚伊勢屋の娘を去る通り

其子樂を去る
二代花　一冊
二代目の伊勢屋乃家へ初ゝ川雛

其子孤食去る
三代蔵　一冊
三代のいせや松魚をう里ける

金庫三代記

譬言　服部應賀著

初代蔵

夫金貨ゞ子を産とゝ諺にいまゞ或親金おもひて汝何を喰て子をうむやと聞けまゞ金ハ利と云ものを喰ゝ孫ゞ子いうまゞそまゝ人間の子を生ふ一間ふ閉籠るといちゞひてまゞ其親金を他家へ稼ふ出して利を喰ゝそまゞ子をうむ事鼠兎ハ思ひもよらゞ。さるゝ其産し子ハ本

家へ戻ることをあまたども其親金首尾よく本家へ立戻
るを稀なるまれ昔より今い猶御裁判多端のうち
ふ夫等の種類を原告する者らが過半なるとつ
誡ふ初め水魚の如く睦ま後ハ吳越の争より御
上ふ御苦労かけるを見まい出さそふ安く取ふか
くくの味方翌日の敵已が金ゆへに一命を失ふ
者あまたがるく宝と思ひまたて金ふいなあるる
金を持べしもつ亀くばと金の身の上を答へ
ハ是ぞまこの金言あるさて茲ふ東都の般若花町

ふ伊勢屋金吉とくあり此者ハ元勢州石部の
宿の貧民ありし時親孝行の報ひあや獨身
となりしころなくば住所より金の塊を堀
出せば是を天の賜ものと思ひ東都ふ携へくり
てそまを賣て若干の金を得ぶおまを元手として
怠らば拝しかば身骨を労する業。天運ふ恢
ひしかさることるまを利を得て終ふ質屋をか
めきのくの地方くの地主となりて三扉の蔵を建
昔をこすまぬ為として金の塊を圖ふかせて掛物と

し朝夕おまを
拜し又出入者ゐも
見せて。人い正直律
義おまび譬へ負ゐ
及ぶとも天の冥助い
あるものと語りしれ
ば是を見聞する者
石部金吉の金兜
と高坪さまる大家

金ゞ子をうむ

「百あのうさぎのこのうさぎのこのうさぎのこ

又家内中の枕紙ハも生紙の反古い用ひさせぬ粘
紙の文ぐらを撰かひて大きをあゝ汚さるといさせ
ぬ又ゝのかゝをさしてゝの汚紙あて行燈のゐいを
掃除させゝの油深るを又捻らせて紙燭として
常ハ爛燭のかゝりや用ひさせるあて其余いあるる
べし或時二十三年ハあゝる悴金太郎百金の万年青
を求めんといへば眼玉の飛出ハどハ怒てしゞ子ハ
あまさのゝ又慾心のきるとゝろゝ縁日あて金銭花
を一鉢文久三ッあてりあきりて悴ハあゝしと

見るゝゝ おとし十九ハあゝる娘のお銀二百両の鬼
を求ゝまとゝゝ雷のごとき声あて呵てしが立る
とき爪の揃いぬ小鳥を買きゝて娘をゝび。ゝて
奢い身をさゝきものなきゝよく倹をゝゝしそれも
一いゝ二いゝの去まゝをやハたゝぬ四人身の廻り一
さいの事を去まゝせよ此鳥い十の去まゝをすれば
十去まゝとゝんでゝの羽いゝも花美を飾ら孫ゝ飼
おいて是を見習へとゝゝしけるゝゝ娘もゝぎゝ二百
両の鬼のかゝりハゝひしゝが二三日ゝぎるがいるや

つぎと籠〳〵あがるものを見て金太郎もこんな草花
いろ〳〵のもと裏家の子供ふくまて来まゝ程なまが
此二人の行末やがて来るべしさて此家の金蔵ハい
昔ようの金銀をあまた来まゝ置けるが開明の
御代ハい無心の者も口をきくものゝうして箱のうち
あて慶長小判欠を来るがつけるハい「アヤ寝」なき
さく百合若殿い七日七夜寝さのをあるも先
ハもるい長寝とゝどもうゝい此蔵の内へさてうゝ
二十年よも寝つゞけざコレくそこハ寝ている大閣金

チト眼を覚して大坂夏冬の咄でもせぬう「イヤもう
戦の咄いせるもまつ平間もまつぴ〳〵モシ達て聞さ
くがうづうる銭でき〳〵ハもけ見てきさまうハたなき
さてる席があるいをもよりもコレ元禄金めをさま
してそちが時代の咄をせよ「それがさーが時代ハい
まづ諸藝人の名高ひ者があつさるれども後代まで
名をよそるのい赤穂の義士ぶ退屈の月覚ハそ
ものしやいうる咄がよいコレく宝永金「おつとがつ
てんゝ〳〵が時代ハい三國一のお富士さんが焼をおこ

ーと事がなんと
きょうり名高い吐
いあるまひサア大の
あらん正徳のだんざ
正徳
ハテさてお氣のぞく
ぞうりが時代いろ
と五年で吐しふす
事もるひ〇へ享保
金二人まををよろく

ものもい　是いめの
つくぶが順ふこうされば
ぜひがるひさてうりが
時代の名高いのを
交趾國より象の牝
牡を貢ぎしが牝を長
寄あて艶し牡ばり
禁闕へ入ときい今の
ようるとことでいるい獣

の身でなりざるも廣南従四位白象と稱て參内
をせ〜めへお公家様方もおんる珍らしいものいるい
とてあまたお歌をお詠るさまさもへうもの一首ばり
まつさ「正」そもい奇持る事その歌いるんとうんさ
さまざ。くらいつく獣るらぬふらいつく是い象いよ
利くうう気がきもぬと讀ざ「正」とまいるくおりろひが
本歌ふ〜ていい字が多ひるんし下の句と。是い象いよ
てくうんざいしやいく〜三十一字の歌ふるらうふ「享」イヤ
く大さるけもの歌い文字もようけいふもむの古実ざ

さんそもとくうその象が江戸へきんて二十年のえで終り
そもを埋さそころをば今ゆうて象死骸とうハ「正」イヤまい
ちぐ〜。そもい中野の宝仙寺のちぐざ「享」鬼子母神う
中野へうんうのちひいるいかんべんしろ「正」ちうし〜その頃い
そもるざい珍〜うう此頃でい象も虎も獅子も珍
しくもるんともるいサアうのたうう元文ざョヤ元文めそ
いうのまあう逐電〜さも此次ハ文政金の番ざャおめう
の身ハるんざう臭ひ「文」ヱひとの一寸ようう身の一尺手前
の身の澱淳くさいとけうう咄せばうう〜が臭ひこけもそる

して、まづ正「こつついあやまつて金持の戸棚ふ居
さとき盗人がつぐ友達をつれて行きこつひつう入口れ
ぞぶの中へおとさまてぞぶの中ふ三年いぐそまつ揚土に
まぐつて道普請の時往来ふ出さまーが是が鋏や銅
るつ土のつつへふこまれて腐死ふるるとろをそぐ金
のありぐさいタ立が身の穢をあらつて二まつぶいるや
人ふひろされをつめぐりくて此蔵へきて仲間入ふるり
まーさ「文そまでおれの臭さけがさつさそこついまと吝人れ
家ふいさときぞろぐうがこついそこつがそいつべき金箱の

中へい釘のつこをいまてこつい佛段の中ふかくされてこ
ぐ抹香の煙で身いふちぐまども朝晩念佛をきつ
あきつぐどさいさぐへ金ゆ往生極樂とおりひのつつ間
もつく糠味噌桶へ宿ぐへをきまとさのい念佛を用て地獄
へおちさもおつぐこと。そまとつつまつ夜よつふつると夫
婦してあちつ六ちつと氣をつんで宿ぐをきせぶそみ主
い一文おりこの百損さつぐへ終ふ若者ふ隠ー所を見つけら
まて吉原へ連て行き。こつさ一晩おりろひめをそつぐ明る
朝そ此家の手代の手ふこつて此蔵ふ入りそや七年ふ

るほどもまぶそめぬくそのあるひがぬけぬと見へる「まれ」正
ぶよ金も人も引いあるひい一生ぬけるめへるんでも氣を付
る事ざサア天保金。是いろ〳〵ヤヨ天保金何もへぬ泣のぐ
保
一私何をかくしまーもう昨夜皆さん方ぬ生別をる夢を見れば
是まで永年一ッ箱ぬ同居をるも深ひ御縁ぬるぬ今更散々
ふるるとろとおりへば小判の耳も逆上りゴザ目ろ黄色ひ涙が
小粒のもうふぷろ〳〵とぶまます其夢の

くるーひ車八二代蔵ふてろうまするぬ〳〵

初代庫 終

紀元二千五百三十四年五月

万亭先生新著述表題

智恵和談理解新文 二才圖笑 同 五穀祭 二号画

畠山重忠 水練先生画

市虎狩 暁齋画

世界中の和を代表して西洋人をちゃの
ちゃうふうを正確別をる孫繞
藝能を学ぶ者ひ多あー
多ぶ用ぶ〳〵ぬ〳〵さ〳〵
さぬ〳〵の学ぶ者ぶ悪人を物
いさして捕縛を象物案

世界中の和を代表して西洋人
ちゃるの清整 全三部
世界大一番分国〳〵ちゃうを名を
ちゃうをの清整

東京書林 浅草花町 小林喜右衛門

金庫三代記

服部應賀著

二代蔵

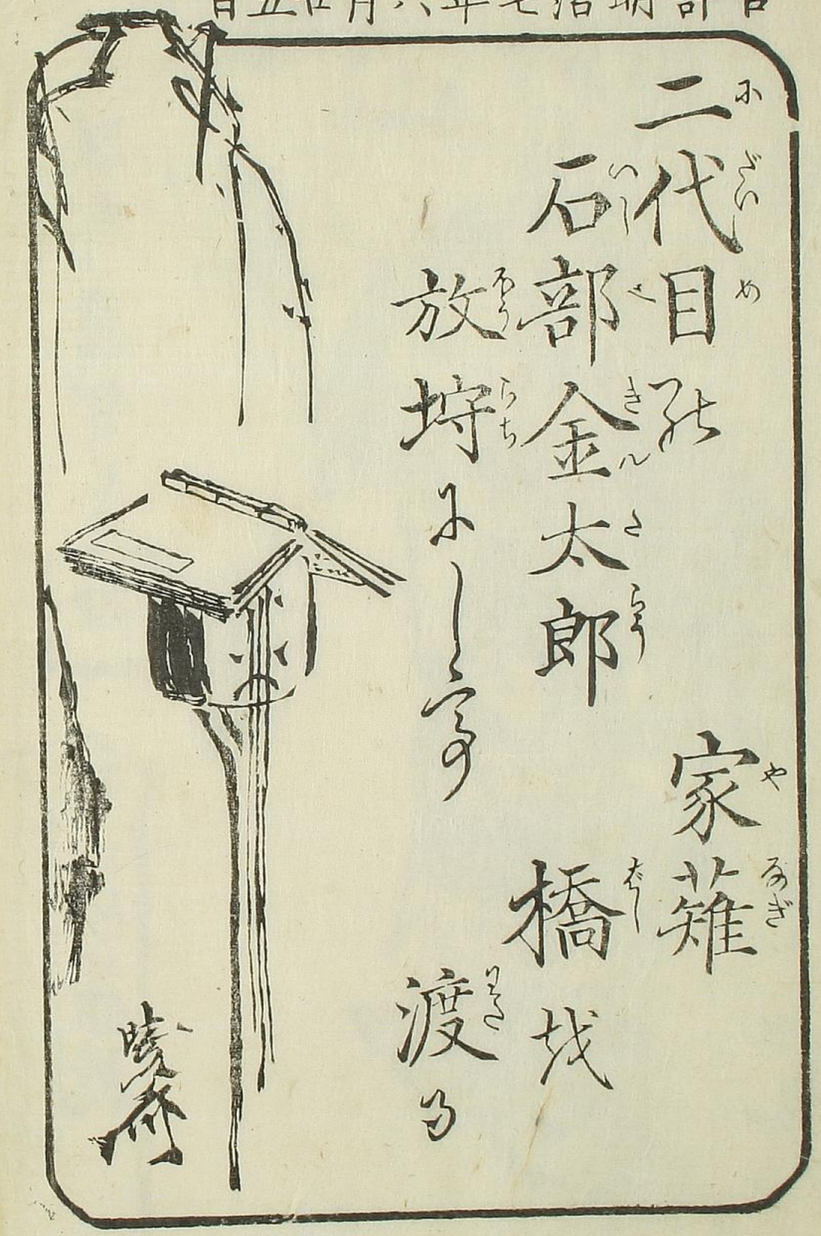
家藏板

定價三錢五厘

官許明治七年六月廿五日

二代目石部金太郎放埒ふしぎ

家葎橋戸渡る



金庫三代記

二代蔵

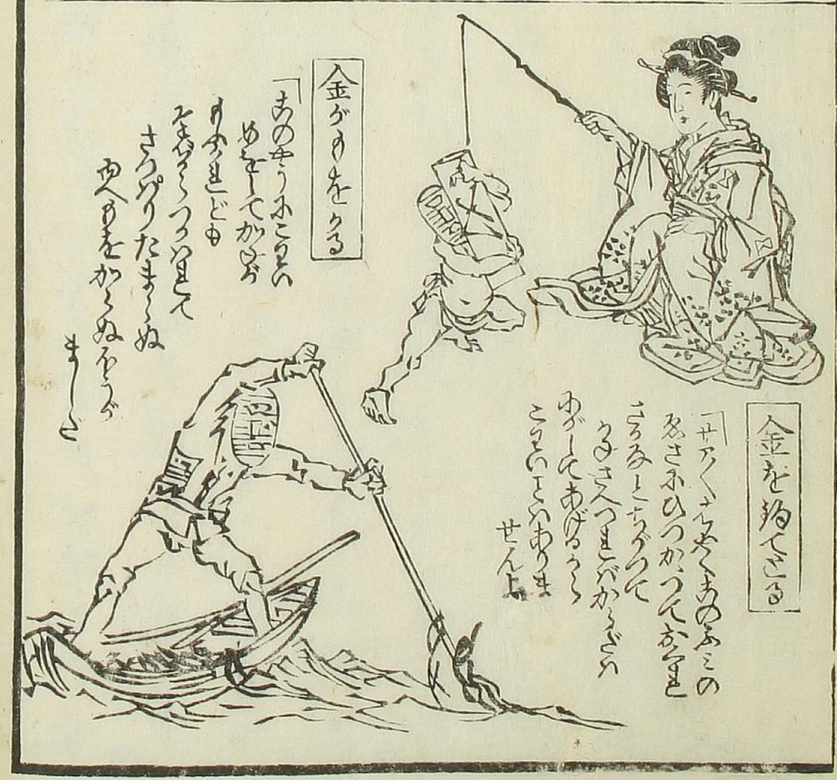
譬言　服部應賀著

夫聖人ふ夢ゐ馬鹿ふ苦労ゐといふ人ども聖人ふ夢あり馬鹿ふ苦労なる世の中ゐへ馬鹿親父ふ驢馬苦労の大慾あり馬鹿女房ふ驢衣裳好の苦労あり馬鹿息子ふ驢銭をつゐふ苦労なり馬鹿娘ふ髪姿の驢苦労あり馬鹿学者ふ生國住居の風土ゐ忘れて他國の變事ふ苦労をる驢々史記なるを見れば

寒無心の金貨とて夢も苦労も無ことあらんやされば
石部金吉の金蔵ゐて天保金の夢物語ゐ同居の古金
一同笑ひをぞめし処へ先年出奔せし元文金立帰り
も一同愁傷の色を直せば文政金が元文ゐらゐかう「君い
永年一箱ゐ同居しるが〻一言の暇乞もせば紛失せ
しい多罪ゐり又紛失の金が今立帰りくるものを天保
金の夢ゐそれ〻が散をるとて泣面をする忌〻さ
昔い當ゐを夢と鉄炮ゐ譬しが今い世がひつくりうへ
しゐるゐて當らぬものい夢と銃ゐれば忌んぎ直しゐ

一笑せんと大音ゐ笑ひけ也が元文金声をひそめて
「コラ〻そんゐゐ大きゐる声をせまへ天保金の夢を天
保やつあさりゐもせよ正夢の去さいがある「そんゐ〻
早くその去さいを〻神武以来ためしもゐい小判の
笑ひ損いよけもども天保金ゐめんがくがゐひ「まが
〻〻が戻てきさ去さいいのとゐ〻て〻〻が見さ世の中
の景況〻〻咄を「手まへ世の中へ出てきておつゐゐと
をい〻景況といゐんの事ざ「けいきやうといゐりさまの
事ざ昔とちがつて今い文明開化ゐゐれば百事皆

改まれば通用金の跡
役ふ紙へいとりゝ
ものゞ出さたゞあい
人も古習ふ馴て正
金ハ焼ても残る宝
ゐりとたちゝゞりき
めばあちゝもまきゝ
互ふ勝さり負りの
相場の違て損徳も



多ゝりしゞ此頃ハ正
金の正の字もゝ
ものゐくて高砂の
謡のやうふさつくの
声ばゝり又小判ハ
いびつのものゐりしゞ
あと役の形ハ丸く
納る印と有る又銭も
鳥の目ふ似さ穴ゞ

かゞをむさふつゝ拾る
つゝハ金をさるこの
一笑ゆゞさぬゝむゞふ
つゝとふよく
あつて
ゐんと多し
りんゞ
ゝう
金ゞかゞをとる
「あまい宝元年でハ
ゐい人の
ものを
たゞとるゝ
ものゞ
ゝう
ゝの名ゞ
「ゝゝく
かゞ
ゝりゞ
さまて
ゝゐ
ゐる人
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

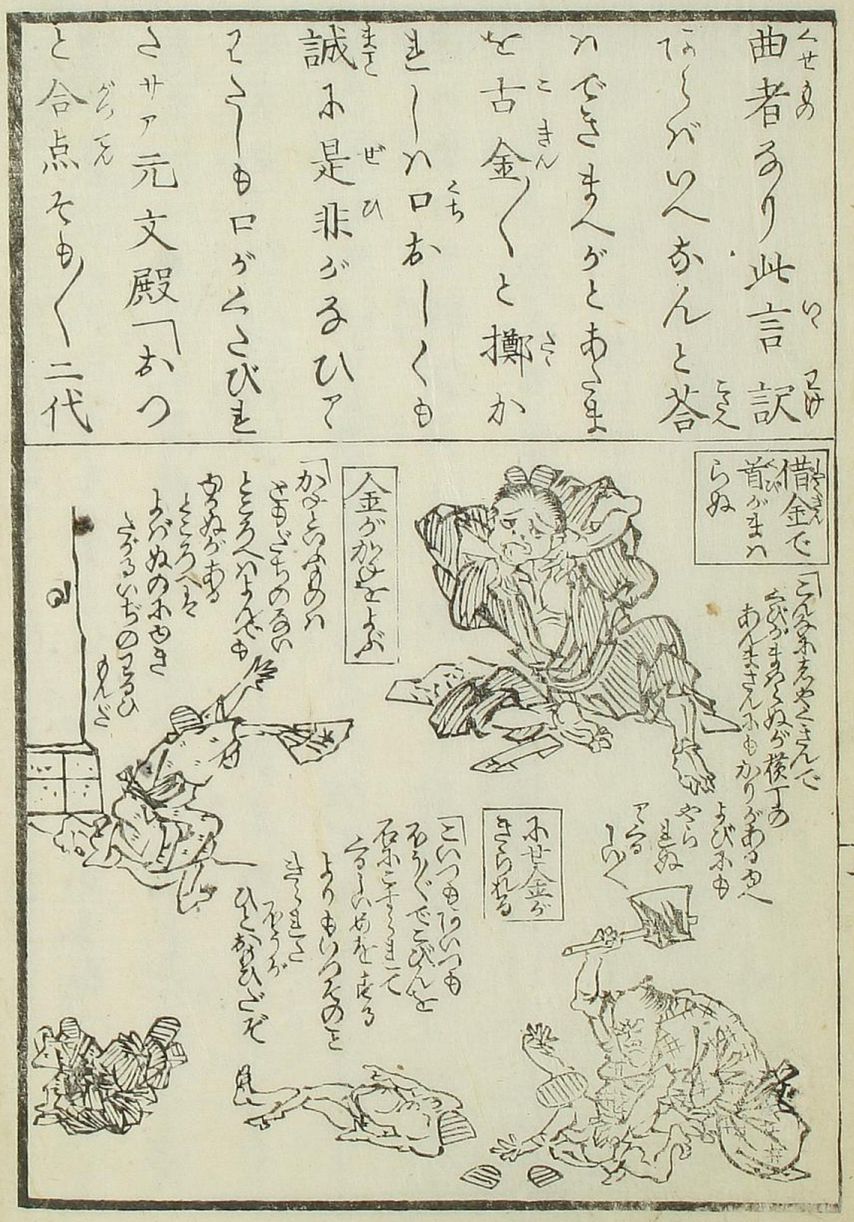
あれが鳥目ともよびさりしが是ゐ又お足といふ名が
ゐもが穴と足とゐあぶるいゐへ穴のあいお足がで
きゝ或ハ一文が十文四文が二十文又十五文ゐ轉任
をるあれが四文が三文ふたゝび當百が八十ゐ國官
されゐ中ゐ一文が一文のもたり彼三文ゐ足らゐ鍛
錢いゝ青錢の中間ゐ属して商人の眼を盗む斯
宝貨の下族等が混乱をるありさまい誠ゐ珎
らしい事でハあいゐアロがくさびをさをこし休む
うち安政小判「是いいゐるを迷子札ゐまがゐ身で

お歴々の中へハ恐入「イヤ〳〵さうでゐいたゝ人四及ハ
分の慶長殿以下其時代ゐよりて量目い不同をも
ども誰が位も皆一両の同葉ゐれバ少も億ゐをる
といゐい「さうがお笑ひ草ゐ聞ゐさをゐ此間
新道の按摩のとこゝ風躰の見ぐるしき二分
判が貧ゐきていゐふい。そも金銀といゐものハ世の中を
立めぐるものゐを通宝とゐよぶものを此蔵ゐ何
年とゐく寢ている古金達ハどことゐくおりろい
処をめぐりあるくゝゝらの眼ゝ見るとさゐぐ

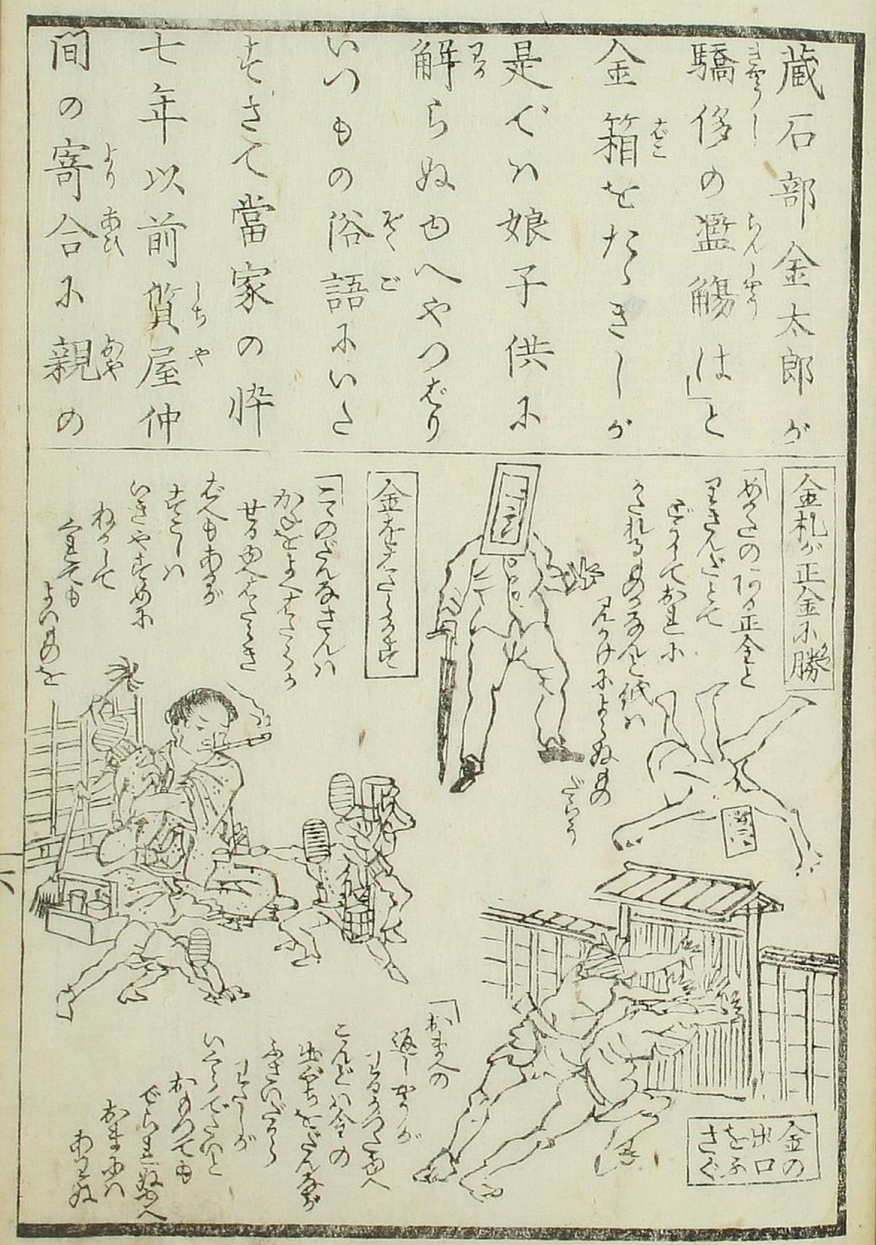
牢ふたつゝ罪人の如くといへば。私があるうぬゝ
とる寝てゐる金の起て働くのゝ今でもできるが一
日寝さいとてそいらをおんで主が寝ゐすゆめとや
りためもが又それいさうでもゝらい寝ばふ
金が働て主ふ忠義の子をふやす又薩广ふい寝
人といふがあつて寝賃を取といふを聞しがお前方の
寝賃いどこゝとゝると黙ゐあとをいけるへ汝よく
きけ慶長様ゐぞゝ當節一両の御位が寝いて十両
の位ふ登ゐ其以下も皆そもふおらふ。昔ゝゝ高利

日掛ふ促衿く働く金ゝゝ論ふいゐゝぬ。といゝゝ
あちこちの店へもけゞ掾扱へ投付ら也て是ハチンく
役ふたゝぬ是ハ坂ざの筑ざのと異名の付いまざよけ
れど宝ともいゝ也ゐ身が石でいびんをこゝゝれて
銀の出のゝ稀ふて銅鑰の正躰をあゝゝ百両が
たゞの三十両ふもゐゝゞ潰鉄の裹ふはいゐゝ獄舎
を出ゝ體ふひゝゝ。やりゝめて勝ゝと思へば又奴
めがむつゝとして何ゝともあゝ也古金達ゝ昔ゝゝふ尋
者ゐゐふいまゞ引換ふも出ば此蔵ふ隠て居のゝ

曲者あり此言訳
たゞいへかんと答
いできまんがとあるまを古金〳〵と擲かを
しいハ口おしくも
誠ハ是非ぶるひて
そこ〳〵ものくさびを
さサア元文殿「おつ
と合点そも〳〵二代



蔵石部金太郎が
驕侈の盛觴は」と
金箱をたゝきしが
是ぐい娘子供ハ
解らぬ也へやつぢり
いいもの俗語ハいさ
をさて當家の忰
七年以前質屋仲
間の寄合ハ親の



名代として柳橋の掟ゝ楼ゝ登りし処手取藝者のおだちといふ懐を見ときまゝしとい考ゝば馴染をかさねて終ゝ男子をうむ此子の名を小金次といふ是を両親ゝかくさん為我元文金五十両の一包を蔵より盗いゞ或家へ質入して通用金二百両をかりそれをもつて彼両人を賄ふといい誰も考らねば親父ゝむひて若且那ゝふきゝ嫁があるとロそゝ言込が金吉さゝゞ先妹を先へ縁付んとゆうゞくへロをうけしが兄とちがつて妹いちと顔

がふとるゝ紅白粉をぬりつけ有ゝまゝせて立流ゝ衣裳を着餅が口へそゝが為ゝいゞ女が見おとさるれば娘いゝぬが着物ゝ戎くれるゝ貰ひゝ抔と悪口いふ者ゝゞ数度の見合も整ゝぬがさて金といふものゝ結の神とかゝして其妹ゝ三百両の土産が付といつゝゝゞ断つゝロゞゝゝ引ゝゝだこゝふゝゝしが鎗栗屋山助といふ者の見世蔵を見て娘をさゝおきて金吉が蔵ゝ惚ゝんで嫁入の落札ゝふるつゝを見れば金が嫁

ふ貫れるお供を娘がなるのと見へる。そもそも引
つぶひて金太郎の嫁ふ持丸屋といふ者の娘と金
吉のめが〻一ツで言込が先でも聟ふいかまへば親
を目當ふ相談きまり間もなく婚礼も整ひけも
が金太郎を家督として金吉夫婦ハ古々の伊勢
へ隠居をる（金吉夫婦の説ハ后の引合ふ出さば）さて金太郎の女房ハさてが
金作りのめがねふたがつぶ髪も獨で四ひ縫針を
いふふ及ば家の福の神さふなれども金太郎ハ是
を嫌ひて彼おぢのうへ寢とまりをるのとあるば

家の道具を持たもたぶを此女房見てとり迚も此男ふ
誠を尽とも水の淡と先をとくも見きとも思ば里へ
帰りて離縁状をとりしう幸ひとありて此家うら
十倍の商人の家へ忽縁づきしとぞいふさて金太
郎ハ福の神さふをるれしをよろこび小金次を或
魚屋へ預ケおぢを直ふ家へ入さ日うち挺友達挺
藝人が立ういり入かうりいりふうて朝うち呑や唄
やで親の禁札ハ竈の焚付となれば二代目の伊勢
屋ハ初鰹の得意場とかるゑどるをばかれまで大金

を費せしが己が稼ぎ一朱もできざる皆やりくりのたまれば其ありふるを付ん為ふかく地面と家蔵を書入て二十両かりてあちこちへ返せばうるさい質くら戻つさが皆さん方いろ〳〵がこの二代蔵のお名残りありてこと〳〵のおぞちが此家い今が見限りどきと金太郎をだまし〳〵そうして蔵の古金をかつぎつけて身構の別宅へ連て行つりとくろ〳〵咄しける

此余談三代蔵ふ属す

二代蔵 終

八亭服部應賀新著作表題

當世利口娘	二号	虫類大議論 上下	日本女教師
智恵の秤	三号	權兵衛種蒔論	洋学古切雀
新製兎美断語		太郎兵衛水掛論	近世ばきれ墓
天上大珠事		孫兵衛活計論	放言深山爲
金庫三代記	全三冊	市の虎狩	みそくそ男
騎人ぶつ〻邑		二ヤアチウ談	和談三才圖笑 全三冊
東京花毛抜	五冊	畑水練	豊年五穀祭 三
青楼半仕通	全三冊	轉ぬ前の杖	大鉈託新文鬼談 三

小説社中發兌書林

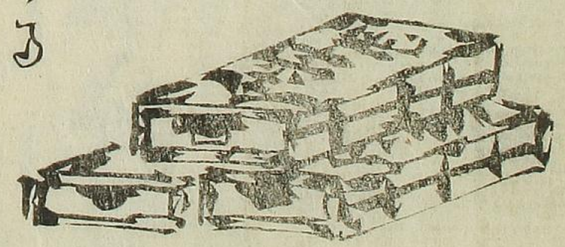
東京

小傳馬町三丁目　山嵜屋清七
大傳馬町三丁目　丸屋正五郎
神田須田町　髙木和助
神田通新石町　紀伊國屋徳蔵
人形町通新乗物町　上州屋重蔵
濵町三丁目五番地　星野松蔵
東西國元町五番地　鈴木勘二郎
大門通　浪花町　鶴屋喜右衛門

官許明治七年六月廿五日

三代目の
石部小金次
魚を賣
遂に家名を
亦毀す

質屋三代目
石部小金次



金庫三代記

譬言　服部應賀著

三代蔵

夫福貴ハ生ル〻者ハ福貴を知ば珎膳も毎日喰へバちんぜんと思ハぬ二代目の伊勢屋金太郎ハ己が身骨を労せぬ金由へ其得難を考〻ねバ湯水のゝ〻ミ費し一時代我等ハ都の生れ色ホそやさを去んゑ形ホるゝを去と我ところが身の上をうさひて面白狸の腹ふくれ。頭を押へる者ハるけをとも天

道いうぐさを免たべき其戒い人を以てるさしむ
れば誰言初うともおく一石金の金蔵う三夜ばぐ
けて金玉が飛ざせばもたや狐の娘入長もちいるいと
朝風の咎忽ち髪結床ふつさうり其夕方い町内
ふるうぬ者もおく弘りけきが是まで石と金の
堅ひ家名が金を呼び無利足のうへふ金極進物
をして金を預し者もあり又安利で預けし者も
うり此者等此咎を聞が否石部の店へ詰うけて
番頭の忠吉ふせまりて。御入用の節い何時ゐり

とも急度返済申とあうる此證書と引かへふ預金を
返してくれと我がちふ罵らをて忠吉い悶るゞ〳〵金
太郎の朝寝をる一間へおもむきて皆帳面ふある預
り金ゐへ御返済るけきが〳〵ねといへば金太郎欠
をおるゞ〳〵警へ帳面ふあれば〳〵我預りし金ゐう
ねが親父うら取とも見世〳〵返をとも勝手次第ふ
去さがようと夜具を冠きが忠吉是ふも又ひきれ
て夜具を掻のけて顔ふ筋をあゝいしたるゞ親御
うう此御身帯を譲受てそんる事いゝ〳〵ば忽

此家蔵を打ハて
しかるゝの手足を
挙取ゝ又御上へ
原告される時い迚
も言開のできぬ負
公事あるがあちら
の入費をハちゝで
出たい重荷のゝへ
の小附ゆへどうあり

金を連て逃る

金が溜る

「昔ちゝの代今いハ
せきいきびしくそのゝ
ゝりゞやもうびんが
あるゝゝ元まをおげ
てもやくおいたらぬと
おゝ人どやつたりおげる
きゐるゐハ
こまる

とも道をつけん御
返液の外いあり斯
る時ゝを地面家蔵
も厭るゝお仲間中
へありと質入をる
されませ是まで度
々御異見もいたし
たるども右ゝ左へ
抜る御方ゐ百度ゝ

金ゐ眼をつけるゝ人

おまへさんハたこーも
金ゐめいらをぬと
にゐハいゝ人ども
金をえるとゝり
がるもへやつぱり
ゆをくをるゝ

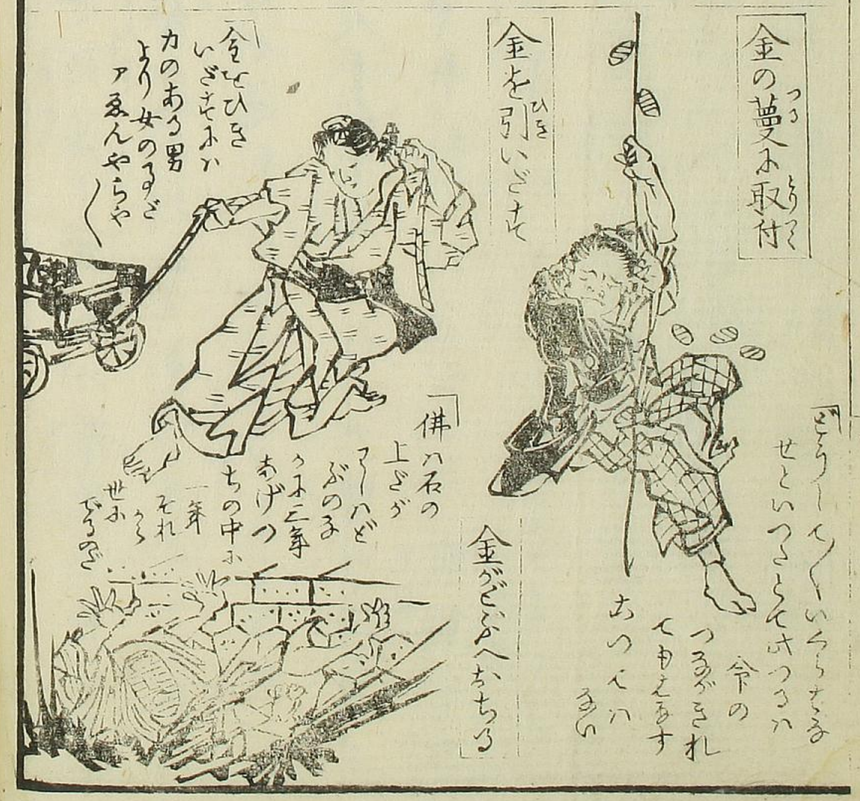
金のある木をおつぺ去よゝ息子

親父がいゝうちハかくしてゐるざゝりを
おゝゞいゝるくまゝと根ゝひき
ぬいん去まゝねが
きゞをせきね

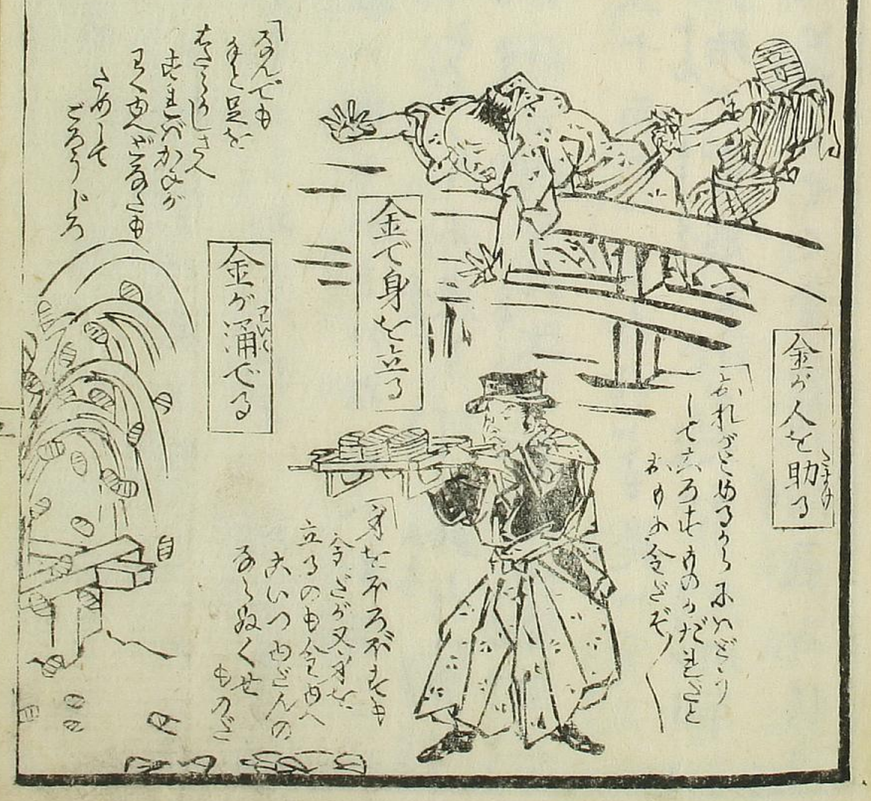
ても同し事なれども親御様い三度の食事ばう
りい稼ひでくまこう奉公人ゐへ味佳物をお喰せる
されておひらう粗食物を召あがりしがいのあさの
御代ふるつてい夫がひつくりかへりて商人い倹約が
第一とて惣菜もあらさまりて年中朝いとうふの糠
味噌汁昼い數の子夕い香物ゐまどもいのあさ獨りい
朝飯うう肴づくめのお酒盛が夜の十二字までを
毎晩つづく主の家来のとりんども同じ人間かれば
いのあさふ喰ぬ物い誰ふも喰れぬが根とるつて悪

助めい大金を盗で欠落し其外の若者も皆暇我
うう子蔵たちい今度のおかこさんがきてうう天窓
ふ瘤が絶ぬといつて是も病氣を言立ふうる逃だ
して私ひうりで三人まんを勤る処へ大勢の洪浪が
押よせもが堤防が手おくれふると家蔵をと
らもまして流行言葉で御異見いさせで発明奮
發をるさまもませ。まづ預り金返海い三日の日延
というしおくと苦くしく見世へ行ば金太郎寝
耳へ水を浴せらもて夜具を引かぶり考

いるると見へしが枕元の硯をひきよせて何ゝ認終るがいかや瞬まどひてその事見へぐ忠吉も漸く三日の日延をらのへて一間へきて見れば金太郎いからば其坐不忠吉



殿金太郎と認るる一封あるを是を開き見れば地面家蔵も某へ二千両の書入ふるりさるを志るし我ハ申さけかき事を隠さりへい跡のところハ汝の了簡ふまらせよろ



しくたのむとの書置かれが是ゝ驚きいそぎおむ
ちせよびて云うぐとかゝさまが更ゝ驚くいろゝ
くたんゝ事もあるうゝとおり人がとく別宅をば
女房でおけまが私い少もかまいぬゆへゝ前よりた
ゝりゝゝるさまとそそくゝゝ戻り行が此上ハ吾引
受んと金蔵の金箱を残らず改め見れが皆空箱
ゝて中ゝ元文金五十両の一包あれども是い實用の
金ゝうぬと云れが殆ど當惑せしが夫より魚川岸ゝ
預おきし小金次を呼よせて金太郎病氣ゝはを

忰小金次家督の披露をゝし諸々の借財預
り金の仕方を附ゝ一年余りかゝるとも
何をいゝゝも大廈の覆るゝ及て空手の一
人二人支ゝるカゝもなけまが諸方の熟談もゝ
のいざゝるゆへ是非ゝく地面家蔵い其引當ゝ
むけ諸道具を以て残らず其海方ゝ充忠吉
小金次い余金もかけまが余儀ゝく東京の
場末の裏家をかりて茲ゝおいて小金次に
そづうの元手を以て仕習ひさゝる業ゆへ魚

賣をさせけるを小金次い放埒の父母の血統
をよゝねび賤き商賣の重頭をも染ぬ天稟
あつき者也へ何卒一度家蔵の主とかつて親
の家名を顕さんと憤発の一心より朝も疾に
起て川岸へ行足をちゝふたんを尽しける
也へ其日の糧をい足りけるもの〻炭の売れざるふりるをば忠吉も安心いたす
其身も日雇を出けるさて小金次ハ凡の垢抜
もつて富士の山を造る如き望も昼夜ふたも尽

稼ぎけるうち或日古脊の大鰹を買ひ常ふ見
負の得意へ持行ども其日を限つて其鰹を何
方へとも買ねがまもおく臭えが付けるゆへも
て行もて家を持かへれば末忠吉い戻らぬ
也へ其松魚を地ふ投いぐゝて獨言ふ。ア。るさけ
おゝ口惜ゝ斯丹誠を尽くゝいへども聊の余銭
も残らぬ殊ふりを始て元直高き鰹を買ゝが
又りを限つて是を賣残せば翌日の元手を
更ふるゝ六れ全く吾ふさづける毒魚るを也ば

迚も開けぬ運と定めて此腐魚を食ひて死ぬがまと日本魂をたこしも乱さば一心覚悟ふ鰹を引さげ出双ふて頭を切落せば腹より打紐のたまりを見てその紐を引けばふしぎと財布の出けるゆへ其中を見るに一封の上書ふ石部金吉の名前あり其封を切ば八百圓の金札あり小金次夢の如くふ驚き唯忙然たる処へ忠吉戻りきて希有のありさまを問がゆへ日頃の心中よりふの始末を語れば忠吉驚き其財布を見て是い西國より御家へ奉公ふきさる悪助といふ者の品なり此者大金を盗うて出奔せしゆへ諸方をせんさくせどもそのありうを忍ざりしがさていい此者本國へ立戻らんとして海船ふ乗しが天罰のがれがさく終ふ海中ふ溺死せしを此魚の是を喰ふといへども此東京ふきさりて数多の商人の手へも渡らば又お得意も是ふ限つて求ざるい金く天より御身へ授しものなりかゝる珎事

私ふるさと直と両人御役所へ出もぐく言上しけもが金札御戻しの上に小金次へハ孝心の御褒美忠吉へハ忠義の御褒美あるがゆへ殊ふよろこびて程なく其金をもつて元の家蔵ふ立ゆゑ三代の家名を顕ハしそ日ゆげの父を養ひしを代ふ稀ふる孝子ふぞなりける

二代蔵 大尾

明治七年六月

騎人必懍筐 一冊讀切 服部應賀著 猩々曉齋画

小学必讀童子問答 一号 萩原乙彦著 吉田庸德校

金庫三代記 全三冊ふゝ切 服部應賀著 猩々曉齋画

東京 書林 濱町三丁目 乃番地 星野松蔵

010190524880